社団法人 日本図書館協会 図書館学教育部会

会　　報　第17号

昭和58年10月25日発行　編集・発行　図書館学教育部会

ごあいさつ

教育部会長　裏田　武夫

再度図書館学教育部会長の重責を仰せつけられました。当部会は図書館学教育者集団の組織としては唯一のものであるだけに，図書館の発展に寄与する図書館学教育の針路選択は，自ら背負うべき重大な責任であります。歴代の部会長ならびに幹事の方々には誠心誠意その重責を果してこられたと思います。ただいつも申訳なく思うのは、部会員に対する諸連絡などで，資料の作成やら封筒の宛名書き，切手貼り，発送，回答・連絡事務等にわたって，先生方の多忙な時間を割いていただいていることであります。これに象徴されることは，われわれの教育者集団の組織自体が開発途上にあり，必らずしも鞏固な基盤の上に立っているわけではないのだということであります。日本図書館協会は全体として組織強化のことを鋭意検討を進めているようであります。当部会も当然全体の枠組みの中で考えられるべきものでありましょうが，教育部会は多少慎重に独自に対処しなければならない点があろうかと思います。

さて，部会長として何か抱負があるかと問われると，特段に今までの部会長と異なる意見を持っているわけではないと申上げるより外はありません。ただ現在の状況に対して誤った選択をしてはならないと深く自戒しております。最近図書館の未来予測について，かなりきびしい，さらに悲観的でさえある論調に出合うことがあります。図書館というものの歴史的役割は終ったと云うものあり，記録情報はすべて，巨大な情報バンク（一つとは限らない）から家庭あるいは執務場所にいるエンド・ユーザーにオンラインで直結し，図書館の介至は必要なくなるであろうと見通しを告げるものあり，さらには図書館員は今后インフォメーション・ブローカーとしてのみ存続することになろう，ちょうど製薬会社から病院や医者の許に派遣されるプロパーのように，などと予測する向きもあります。未来予測などというものは外れるのが当り前だと云う人もありますが，われわれは図書館に対するきびしいチャレンジとして受けとめたいと思っております。大きなことにひびくかもしれませんが，図書館が人類社会の中でどう自らを適応させていくのか，これがわれわれにとって深刻な問題提起だと思われるからであります。こんど版を改めて刊行されたALAの「図書館用語集」には，「レファレンス・サービス」が消滅しました。それは「インフォメーション・サービス」に包含されています。私などには，ほんとうに寂しい気がします。しかし，適者生存は冷厳なる法則であり，いささかの感傷も許されません。そのような状況の中で図書館学の教育そして図書館員の養成をどう方向づけていくか。皆さんともよく相談して，誤ちの無いよう努力してみたいと思っています。何とぞよろしくご協力ご指導たまわりますようお願いいたします。

58.12.22

昭和58年度図書館学教育部会総会の記録

日　時：昭和58年5月27日　10～12時
場　所：日本図書館協会会議室
出席者：13名　委任状18名

裏田武夫部会長の挨拶に続いて，塩見昇氏（大阪教育大）を議長に選出し，細野公男（慶応大）高橋和子（相模女子大）両氏が議事録署名人に指名され，議事に入った。

報　告

1. 昭和57年度 事業報告

北島前部会長より総会資料にもとずいて前年度の主要活動が報告された。

(1) 第14回 図書館学教育研究集会の開催
テーマ「図書館学教育におけるカリキュラムの構築をめぐって(Ⅲ) データ・ベースについて」

(2) JLA福井大会 第7分科会図書館学教育
テーマ「生涯教育の場を担う図書館員の在り方」

(3) 「会報」第14号，第15・16合併号

(4) 「図書館学教育担当者名簿1982年版」発行の為の調査と編集

(5) 「図書館職員の採用制度に関する調査：東海北陸6県」のための調査と集計

2. 昭和57年度 決算報告

古賀節子幹事より報告

3. 昭和57年度 監査報告

深川恒喜会計監査より，会計監査の結果，適正であったとの報告

4. 役員改選結果報告

平野英俊選挙管理委員長より報告があり承認された。

昭和57年度決算報告

収入の部

費目	予算	決算	備考
会費	253,800	260,000	54年度 3,000　55年度 3,000　56年度 45,000 57年度 188,000　58年度 21,000
交付金	150,000	150,000	
雑収入	1,000	23,765	特集号 28冊 20,140 研修会残金 2,660 利息 965
繰越金	228,897	228,897	
計	633,697	662,662	

支出の部

費目	予算	決算	備考
事務用品	1,000	730	事務用印
会合費	60,000	26,100	
通信費	100,000	70,320	
交通費	120,000	115,000	
会報等印刷費	80,000	60,000	会報第15・16号合併号
研究集会費	20,000	23,800	印刷，切手代
専門職検討委員会	150,000	220,510	特集号印刷代
名簿作成費	50,000	20,800	アルバイト代
部会選挙費	30,000	32,000	
予備費	22,697	9,000	見舞金 4,000 JLA大会講師謝礼 5,000
58年度へ繰越		84,402	
計	633,697	662,662	

議　事

1. 昭和58年度 事業計画

裏田武夫部会長より説明，承認された。

(1) 第15回 図書館学教育研究集会の開催

テーマ「ニュー・メディアに対応する図書館学教育」 松下電器・技術情報室の見学を含む

日　時：9月5日～7日　（月～水）

場　所：関西セミナー・ハウス　（京都）

見　学：松下電器産業，技術本部

(2) JLA山口大会 第8分科会図書館学教育

テーマ「専門職としての図書館員の養成をめざして」

日　時：10月27日　（木）

場　所：山口放送ビル2F大ホール

(3) 会　報　　年2回

(4) 会報特集号発行「図書館職員の採用制度に関する調査：東海北陸6県」

(5) 「図書館学教育担当者名簿 1982年版」発行

2. 昭和58年度 予算

古賀節子幹事より説明，承認された。

昭和58年度予算

	費目	予算	備考		費目	予算	備考
収入	会費	261,600	2,000円×157人×0.9－21,000円	支出	事務用品費	1,000	
					会合費	60,000	
	交付金	150,000	JLAより		通信費	100,000	
	雑収入	1,000	利子等		交通費	120,000	
	繰越金	84,402			会報等印刷費	80,000	会報17号・18号
	計	497,002			研究集会費	20,000	案内の印刷等
					専門職制度検討委員会	100,000	特集号の印刷代等
					予備費	16,002	
					計	497,002	-

第13期部会役員選挙結果

第12期 部会役員は次のように決定した。

部 会 長：裏田武夫（東京大学）

幹　　事：古賀節子（青山学院大学）

今まど子（中央大学）

渋谷嘉彦（相模女子大学）

細野公男（慶応義塾大学）

渡辺信一（同志社大学）

会計監査：黒岩高明（図書館情報大学）

前島重方（国学院大学）

（敬称略）

本年2月に行なわれた部会役員選挙の結果，裏田武夫，北島武彦，古賀節子，今まど子，渡辺信一の5氏が幹事に，黒岩高明，前島重方両氏が会計監査に選出され，全員就任を受諾。

3月22日新幹事会が開かれ，幹事選出要綱第4条により裏田武夫氏を部会長に選出，裏田氏は後日部会長就任を受諾。このため幹事に欠員を生じ，次点者細野公男氏を繰上げ当選とした。

5月27日部会総会において，北島武彦氏より健康上の理由で幹事の辞退を申し出られ，幹事会はこれを承認した。再度幹事に欠員が生じたので，前回の例に従い役員選出要綱第5条第3項により，渋谷嘉彦氏に部会長指命幹事として就任を依頼し受諾され，幹事が出そろった。役員選出要綱第8条が前年度の総会で改正され，投票者数が部会員の3分の1になったので，今回の選挙は問題なく実施された。

第15回図書館学教育研究集会

今回の研究集会は，9月5～7日までの3日間久しぶりで関西で開かれました。テーマは「ニュー・メディアに対応する図書館学教育」というもので，守口市にある松下電器産業株式会社の御好意で技術本部でニュー・メディアと技術情報室の見学をさせて頂けるという得難いチャンスに恵まれ，40名を越す参加者があり盛会でした。

第1日目はJICST 大阪支所長 黒沢慎治氏の"ニュー・メディアについて"と題する発題講演がありました。

夜は黒沢氏と翌日の見学先松下電器・技術本部の情報室長妹尾哲男氏もわざわざ御参加下さり，にぎやかな立食パーティーで懇親を深めました。

第2日目は，貸切りバスで松下電器・技術本部へ行き，技術開発推進センター所長の白石氏の御挨拶に続いて，妹尾氏から情報室の概要をうかがい，小グループに分れて見学させて頂きました。

お昼食を御馳走になり，午後は技術館の見学，OA関連機器やビデオによるHi-OVISの紹介等珍しいかぎりでした。百聞は一見に如ずとはまさにこのことのようでした。

3日目は，黒沢氏の講演と松下電器の見学をふまえて，原田勝氏の司会で自由討議を致しました。参加者の殆んどが積極的に発言されたのも，ニュー・メディアによる刺激が強かったからかもしれないと思いました。

裏田部会長の総括の後閉会，それぞれに京都の町へ散って行きました。

なお，ニュー・メディアについてよくまとめてお話し下さいました黒沢慎治氏，見学する機会をお与え下さった松下電器産業また，私共の見学をアレンジし御指導下さいました妹尾哲男氏に厚く御礼申上げます。

記録を取って下さいました方々や司会の方々にもお礼申上げます。切角記録を作って下さいましたのに紙数の都合で割愛せざるを得ない部分が沢山あり申訳もございません。悪しからず御了承頂けますようお願い申上げます。

ニュー・メディアについて

黒沢　慎治（日本科学技術情報センター 大阪支所長）

1. ニュー・メディアとは

最近，新聞や雑誌でしばしばキャプテンとかCATVといった言葉が登場してくる。そして，これらの言葉を総称してニューメディアといっている。

メディア，すなわち情報を伝達する媒体が新らしくなった，あるいは新らしい媒体が出現したということで，世間ではこれをニューメディアと称しているが，果たしてその実態は何んであろうか。

先づ考えられることは，知識や情報に対する考え方が変ってきたことであろう。自分が所有している知識を次の世代に継承せしめるために，粘土板や木簡，パピルス，紙などに記録し，伝達することが最初であった。

活版印刷の発明は，次の世代に知識を伝達するだけでなく，同時代の他の多くの人達に

意見を述べ，連絡し，知識や情報を伝達するようになってきた。いわゆるマス・コミュニケーションである。これは無線の発明により，ラジオが，さらにはテレビが発達し，現在に至っている。

しかるに，現在ではこのような知識や情報の伝達の他に，知識や情報を意志決定の材料に用いられるようになってきた。天気予報を聞いて傘を持って出かけるといったことから，研究開発を進めるうえで，さらには新らしい製品を開発し商品化するために，情報は重要な意志決定の判断材料となってきた。

次に，技術の発展が新たな媒体を生み出したことである。計算機技術の発展が情報をデータベースとして蓄積し，即時的に欲しい情報を探し出し，利用できるようになった。また，パーソナルコンピュータの一般化も事務の合理化や省力化とともに，新たな媒体のための機器として大きな役割を果しつつある。

通信技術も急速な進歩を示し，ディジタル・データの電送，大量のデータの一括電送，回線も銅から光ファイバーの利用など目覚しい。また，これらのハードウェアのコストも低下してきていることも，ニューメディアの出現を容易にしている要素でもある。

第三としては，社会的要請があげられる。家庭においても，企業においても，また社会全体でも，情報を意志決定の材料として用いるようになり，情報を容易に得るため，今までの媒体では満足し得えない状態にあり，新らたな媒体を要求するようになってきた。

また，経済の低成長下にある今日，景気回復の一つとしてニューメディアを取り上げている。特に，光ファイバー，端末機器，回線の中継機器などハードウェアについては景気回復に大きく寄与するものと思はれる。

2. ニュー・メディアの現況

情報媒体としては，もっとも古くしかも一般的なのは紙であり，手紙，図書，雑誌，新聞といった形態で情報を伝達している。紙に代るものとして一時はマイクロフィルムがもてはやされたこともあったが，まだ完全に紙の代替物とはなっていない。

次に，電話，電信，テレックスが情報の伝達媒体として用られているが，最近，電話回線を使ってディジタル・データの電送，ファクシミリの電送が一般化されてきた。

これに対して，ラジオ，テレビといった無線通信も各家庭や企業に入り込んでおり，我々の生活の中で無くてはならない媒体となっている。

ニューメディアも結局のところこの三つに区分される。第一図をもとにニューメディアの現状を簡単に説明することとする。

左端は従来のメディアであり，次に現在ニューメディアといわれているものを示し，その次にこれから現われるニューメディアを並べてある。

テレビの発達はさらに自分の欲する番組を放送する要求を生みだし，多チャンネル化の要望となり，放送衛星としてニューメディアの一角を占る。一方，画像の品質向上として高品位テレビ放送が課題となっている。これに対して，放送を通じての情報の伝達としてテレテキスト（文字多重放送）が現われ，ディスプレイ上に天気予報とかニュースなどを必要な時に得られるシステムである。

我が国では，難視聴対策の一環としてCATV（有線テレビ）が普及しているが，アメリカではテレビ番組の多チャンネル化として現われており，30ないし50チャンネルもの番組を放送している。これに対し，双方向CATVは地域のコミュニケーションの一環としての役割を有しているので，内外から期待されている。

通信量の急激な増加により，従来の通信ケーブルでは処理し得ない状況にきており，新らたなケーブルの敷設が必要になってきたが，コスト的に問題がある。コスト的には，地上

および海中にケーブルを敷設するよりも通信衛星を打ち上げる方が廉価な状況にあり，主要国では衛星通信は一般化され始ており，我が国でも今年の2月に「さくら2号」が打ち上げられた。

電電公社では，これからの通信システムとしてINS（高度情報通信システム）の構築に入っている。光ファイバーによる光通信であり，電話からファクシミリ，データ通信，画像情報などを総合的に伝達するシステムとして，21世紀の完成を目指している。

電話とディスプレイとを組み合わせて端末機とし，情報提供者から必要な情報を求める方法の一つとしてビデオテックスがある。我が国では，電電公社によりキャプテンシステムとして最近まで実用化実験が行われ，59年には商用化に入ることとなる。

データベースサービス業は最近いろいろなところで始められている。特に，JOISとかPATOLISなどの科学技術関係が盛んである。ビデオテックスとはやや異なるが，専門家のためのオンライン情報検索システムとしてこれから益々発展するであろう。

また我が国では実験段階であるが，米国では商用化されているものにテレビ電話やテレビ会議がある。画像情報の伝達のため情報量が非常に多いので，本格的な利用には至っていない。

学術雑誌などの一次情報がデータベース化されたり，各種の案内情報がビデオテックスやテレテキストなどでサービスされたりすると，紙による情報提供は減少することと考えられる。すでに，二次情報分野では，データベースサービスの発達により，抄録誌や索引誌の発行部数が減少傾向にあるといわれている。

しかしながら，独立系の媒体としての紙の地位が他の独立系の光ディスクなどの媒体にとって代るとは考えられない。それは，現在のところ直接読むことが可能なかつコスト的に廉価であるのは紙の他にないからである。今後，益々機械可読資料は増加することが考えられるが，直接一般の利用者に普及するよりも，入力媒体として，またはデータベースとして用いることとなろう。

3. 図書館活動におけるニューメディア

図書館に及ぼすニューメディアの影響としてまづ考えられることは，学術雑誌の形態の変化であろう。この形態の変化としては，雑誌自体が冊子体から磁気テープなどの機械可読資料に，さらにデータベース化することにあるが，直接データベースへの入力による投稿，すなわち電子雑誌も一部試みられている。

かかる状況では，図書館としては従来の冊子体の収集・処理・保管といった業務とは異た業務を考える必要があろう。もっとも，完全に冊子体の雑誌や図書が無くなるとは思えないが，冊子体の減少傾向は予想されよう。

学術雑誌の他に，目録，ハンドブック，事典類などもデータベース化され，利用者は冊子体よりもデータベースを利用することであろう。

現在，すでに図書館自体も機械化・合理化により変りつつあるが，ニューメディアの出現により根本的な変化を余儀なくされることであろう。そこで，これからの図書館活動としてはいかにしてニューメディアを取り込み，新らしい図書館活動を展開せしめるかにある。

ニューメディアを用いて，蔵書の効率的な利用，たとえば，データベース化による図書館間の情報交換，ファクシミリによる電送などはすでに話題に上っていることである。さらには，独自のデータベースを作成し，提供することも考えられる。

情報の大量化と多様化は利用者をしてその選択に困惑せしめることとなろう。これからの図書館活動としては参考サービスが重要な業務となることと思われる。そこで，ニューメディアは参考サービスにとって大きな威力

を発揮することとなろう。

情報化時代とか，超工業化時代などといわれ，何か情報に関係しなければならないような錯覚に取らはれることが多い世の中であるが，根本は物，ハードウエアではないかと思う。物があってこそ情報ではなかろうか。そこで，情報を扱う場合，情報を集めることが目的ではなく，集められた情報を分析し，その結果を物に適用することではなかろうか。情報分析こそこれからの中心的課題ではなかろうかと思う。

（質　疑）

近川：ビデオテックスは図書館と競争するかもしなないということをもっと詳しく。

黒沢：出版社，教育出版がこれに目をつけている。百科事典，辞書をこれでサービスすることになると，図書館に行って調べるよりも電話でということになる。JICSTも一次資料を入力することを考えている。

細野：学生から調査・検索に利用料が取れないので，冊子目録を使わせることになっているが。

黒沢：図書館でデータベースを作り提供するのも一つの方向であろう。

森崎：電子雑誌で掲載に投稿者が支払うのは何故か。ペイするのか。

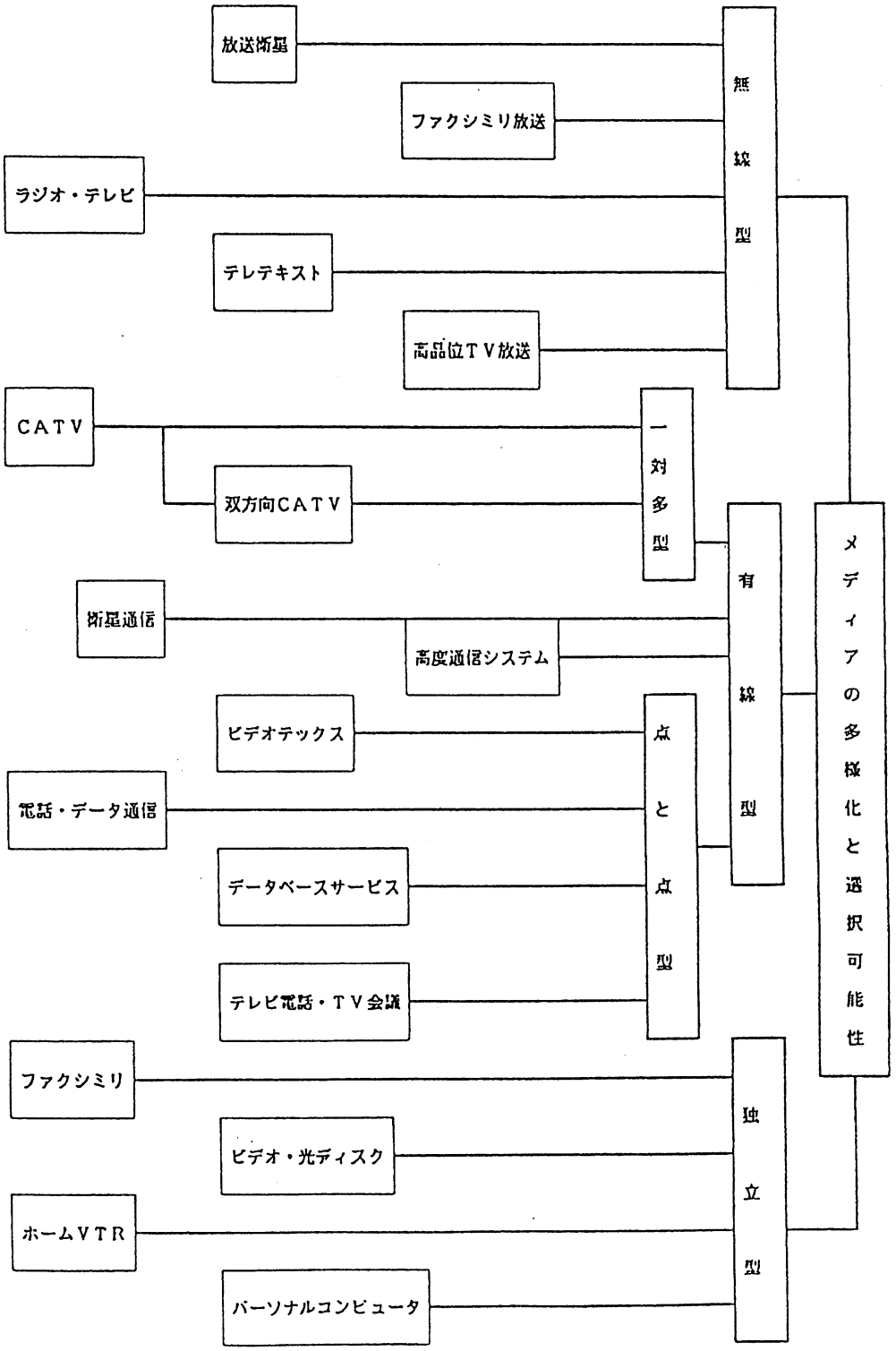
黒沢：米国では投稿料を払うのが一般である。日米の考え方の相違である。雑誌利用には利用者も支払う。情報の出入には経費がかかる。データベースにはこれまでの雑誌の考えが当てはまらなくなる。米国の研究者が自宅で端末をたたくのは通信費を大学が負担するので中身の料金だけでよいからであろう。

鬼頭：お話のニューメディアはディスプレイを見るものだが眼の疲れなど健康管理上問題がある。音でも聞けるようにならないか。

黒沢：JICSTでも問題になっている。漫然と見るTVと違い端末は近くから凝視しなければならない。大きな社会問題である。プリンター，音声出力は今後の課題であるが，後者はコード情報については実現が可能だがパターン情報については難しい。

伊藤：電子雑誌の今後はどうか。65ドルの投稿料はこれ迄と比べ高いのかどうか。

黒沢：相当実験されているが，小さいグループに向くと思う。会員数1～2万の規模のものに広がって行くかどうかは疑問である。投稿料は安いと判断している。



第一図　ニューメディアの概念図

第2日　9月6日

松下電器産業技術本部見学

高橋和子氏（相模女子大学）

研究集会第二日は，松下電器産業(株)の見学をかねた，ニューメディアについて見聞を広めるための勉強会であった。以下に当日のおおまかな模様を報告します。

9月6日朝，貸切バスにて関西セミナーハウスを出発，1時間ほどで松下電器技術館に到着，セミナールームに通される。すでに机上には資料類が用意され，ここが私どもの二日目の教室となる。

午前中は，技術本部技術開発推進センター情報資料室の概要についての説明と作業現場を見学した。

ここでは技術本部がセンター的機能をはたし，技術情報室は18名（男性6名，女性12名）のスタッフが活動の任にあたっている。配布資料『松下電器における技術情報活動』の中に主要プロフィールとして，資料の所蔵状況および定期刊行物の各一覧表があげられているが，企業であるところから，中でも各国の特許資料がかなり重点的に収集されており，年間30万件位主としてマイクロフィルムとのことである。また定期刊行物の中では，『技術月報』『技術資料速報』『ビデオ情報』などとともに，社内向け有料サービスとして，新聞記事を中心にパッケージ化，コピーサービスの形でニューメディア関係の記事を紹介する，『ニューメディア情報・月刊』が発行されており，月額3,000円で130－140部が社内で購読されていると言う。さて，午前中のハイライトは，光ファイルシステムを理解出来たことではないかと思う。まさに情報化時代のニューメディアのひとつとしての，光ディスクによるファイリングシステム，すなわち従来の紙から光によって文書・画像情報の記録や保管，必要とする情報の自動検索，ハードコピー化が可能なわけで，パナファイル（光電子ファイル）は直経20㎝のディスク1枚にA4サイズで10,000枚分の文書・情報を蓄積（静止画ディスクファイルには，15,000枚の静止画像を記録）出来るというもので，平凡社の世界大百科事典全巻が，LPレコードよりもコンパクトなこの直経20㎝のディスク1枚に収められ，また必要とする個所を部分的に取出し，プリンタより記録出力することも可能なのである。情報の管理・検索の効率化から見ても，OA時代の核となるシステムと言われるゆえんであろう。

午後は，午前中に見学した技術情報室に関しての資疑応答からスタートした。光ディスクの内容の消去の可能性，ディスクサイズの規格化の可否，年間の資料購入費，冊数，職員の資格とその採用方法，男女職員の役割，利用実態，資料室のネットワーク，社内情報のデーターベースなどが主な話題であった。引続き2グループに分れ技術館の見学を行う。「情報・通信技術，エネルギー技術，部品・材料技術，生産技術の重点技術分野における成果をご紹介」のとおり，創業期から今日までの開発の足跡と，最先端の技術をまのあたりにすることが出来た。中でもホームオートメーションコーナは，ホームコンピュータをはじめ機器やシステムの利用によって，「家庭の情報管理や家事作業」をどのように合理化することが出来るかを紹介している。この未来像？とも言うべき新しい家庭のモデルルームには，驚嘆と同時に一瞬言いようのない複雑な思いにとらわれたのも事実である。「人間性豊かな生活を送るため」に，正直言って取り入れたい部分もあるけれど，本来の家族社会のコミュニケーションはどうなるであろうか。ここでは，ことばを中心とした体制が大きく変ろうとしているとも言えよう。効率的であるよりもまず人間味を大切にしたいし，「こんな生活はしたくないわ」と思ったのは，どうやら私1人ではなさそうなのであった。

また，オーディオルームでのデイジタル録音によるコンパクト・ディスクの実演は，生演奏に近い美しい音が聴けて，まさに一服の清涼剤であった。

引続きＯＡ関連機器の紹介では，たいへんユーモラスにしかもわかりやすく，技術開発に関する基本原理とも言うべき話が伺えた。

さて，スケジュールの最後は，Hi－OVISのビデオによる紹介で，時間の関係もあって，ビデオを見てから若干の説明がなされた。

映像情報システム＝Hi－OVIS（Highly Interactive Optical Visual Information System）は，新しい情報伝達のシステムで，ユーザが必要とする情報を的確・迅速にしかも双方向に伝達するというもので，世界でも初めての試みとして，光ファイバーケーブルを採用した完全双方向型映像情報システムの運用実験が，奈良県東生駒で行なわれており，世界各国での新しい情報システム研究の中でも，もっとも進んだまさにニューメディア時代の担い手として注目を集めているといわれる。

既存メディアとニューメディア，これら多様なメディアをどの様に選択し，使いこなしてゆけるかが，今後に残された課題ではないかと思った次第である。

ともあれ，松下電器産業(株)の科学の粋，技術の粋に触れることの出来た有意義な一日であった。

第３日　９月７日

自　由　討　議

テーマ：ニュー・メディアを考える。
場　所：関西セミナーハウスホール
司　会：原　田　　勝（京都大学）

次のような観点から討議がなされた。

Ⅰ　図書館の立場からニュー・メディアを考える。

Ⅱ　図書館業務に与えるニュー・メディアの影響

Ⅲ　図書館学教育に与えるニュー・メディアの影響。どのように図書館学教育に取り入れていったらよいか。

次の文献リストは，渋谷幹事が研究集会の為に選択しリストして下さったもので当日配布され，解説された。

ニューメデアと図書館　参考文献リスト

1. 誰でもわかる最新ニューメディア読本　和多田作一郎著　ビジネス社　1983　240p.
2. ニューメディア用語辞典　日本放送出版協会　1983
3. The future of the printed word ; the impact and implications of the new communications technology. Edited by Philip Hills. London ; Frances Pinter, c1980. 172p.
4. Strategies for meeting the information needs of society in the year 2000 , by Martha Boaz. Littleton, Colorado ; Libraries Unlimited, 1981. 197p.
5. Books, libraries and electronics ; essays on the future of written communication, by Efrem Sigel, et al. White Plains, N.Y. ; Knowledge Industry Publications, c1982. 138p.
6. The impact of new technology on libraries and information centres ; report of the Library Association Working Party 1981-2. London ; Library Association, 1982. 54p. (LA pamphlet 38)
7. Libraries and librarians in an age of electronics, by F.W.Lancaster. Arlington, Va. ; Information Resources Press, 1982. 229p.
8. Libraries in the year 2010 ; the

information brokers, by S.D. Neill. In "The futurist," October 1981. pp 47-51.

総　括

部会長 裏田武夫氏（東京大学）

マクルーハンはグーテンベルヒ体制からの脱却といっているが，現在のわれわれの図書館はこのグーテンベルヒ体制の中にあって，社会の中で機能しているわけである。しかし，記録情報の生産，配給，蓄積，加工，利用，再生産にわたって，広大な裾野をもっており，いれば系をなしているわけである。しかし，ニューメディアの参入は，このグーテンベルヒ体制における図書館を支える系が劇的に変更せざるをえないような挑戦をうけている。ある場面では，図書館という中間項をとびこえて巨大な情報バンクからエンドユーザーに直結することがあるだろう。こうした挑戦をうけて，どのように自らを適応させていくか。これをしっかり見定めて，次世代の教育に組込んでいくことが基本であろう。

会　員　消　息

牛島悦子氏白百合大学へ

本年4月から白百合大学に司書課程が開設され，牛島悦子氏が助教授として就任された。同大学では，一昨年来司書課程が部分的に開講されており，上智大学とタイアップして資格が取得できるようになっていたが，これで全科目が開講になり，大学独自で資格が出せるようになった。

河合弘志氏立教大学へ

立教大学教授清水正三氏の停年退職に伴ない，後任として大東文化大学助教授河合弘志氏が立教大学に移られ司書課程を担当される。

ニュース

◎　本年4月より梅花女子大学（大阪）に司書課程が開設された。

◎　図書館情報大学学長松田智雄氏は，9月30日を以って辞任された。後任には同大学副学長町田　貞氏が選出された。

幹 事 会 記 録

1982年 4 月 9 日　（出席者名なし）

(a)　昭和57年度　部会総会の件

(b)　全国図書館大会　図書館学教育分科会の件

(c)　「図書館年鑑」の図書館学教育担当部分の編集者選任の件

(d)　部会員増大策の件

1982年 5 月13日　（北嶋，古賀，今，渡辺，高山）

(a)　部会総会の件

(b)　教育部会研究集会の件

(c)　全国図書館大会の件

(d)　図書館職員の需給に関する調査の件（東海北陸地区）

(e)　会報特集号発行の件

(f)　図書館学教育担当者名簿 1982年版発行の件

1982年 6 月23日　（北嶋，浜田，古賀，今）

(a)　研究集会の件（案内書発送）

1982年 7 月30日　（北嶋，浜田，古賀，今）

(a)　名簿作成の件

(b)　専門職検討委の件

1983年 3 月22日　（北嶋，浜田，古賀，今，渡辺，平野）

(a)　第13期　幹事，会計監査の選挙結果報

告の件
(b) 全国図書館大会の件

1983年 3 月22日 （北嶋，浜田，古賀，渡辺，裏田，平野）
(a) 新旧幹事会事務引継ぎの件

1983年 5 月20日 （裏田，北嶋，古賀，今，渡辺，細野，平野）
(a) 北嶋幹事辞任に伴う幹事補充の件
(b) 研究集会の件
(c) 教育部会定期総会準備の件
(d) 全国図書館大会　山口大会の件

1983年 6 月18日 （裏田，古賀，今，渡辺，細野，渋谷）
(a) 研究集会の件
(b) 「図書館年鑑」編集担当者の件

1983年 7 月 4 日 （裏田，古賀，今，渋谷，細野）
(a) 研究集会の件
(b) 教育部会への施設会員制導入に関する件
(c) 全国図書館大会の件

1983年 7 月28日 （裏田，古賀，今，渋谷，細野）
(a) 研究集会の件
(b) 全国図書館大会の件

1983年10月 6 日 （裏田，古賀，今，渡辺，渋谷）
(a) 研究集会会計報告
(b) 全国大会の件

納
教育部会費[illegible]入者名簿

（会報 15・16合併号以降）

昭和54年度
中森強　金村繁

昭和55年度
中森強　金村繁

昭和56年度
中森強　中村初雄　金子量重　尾原淳夫　大橋一二　松井幸子　河井弘志　中沢保　金村繁　杉本富士夫　増井照貴　山崎武雄　遠藤英三　佐伯登志子　鬼頭当子

昭和57年度
平野英俊　野口契子　高木進(新)　青木次彦　中森強　伊藤松彦　岸本宏子　森崎震二　和田弘名　永田清一　中村初雄　中村泰正　貴田春男　中嶋正夫　源昌夫　金子量重　尾原淳夫　大橋一二　奥村藤嗣　岩猿敏夫　福島康子　松井幸子　河井弘志　和田吉人　朝日奈大作　佐野大和　松村多美子　常盤繁　塩見昇　中沢保　岡田靖　浅野十糸子　伊藤順　杉本富士夫　増井照貴　石川徹也　山崎武雄　小林宏　服部金太郎　渡辺正亥　埜上衛　小野賢吉　菊池しづ子　遠藤英三　伊藤数美　寺田光孝　神野清秀　後藤純郎　深井耀子　菅原春雄　伊藤正彦　大野靱子　高鷲忠美　工一夫　久保輝己　草野正名　小林矩子　岡田温

昭和58年度
寺田光孝　亀田弘　中村泰正（千円）　萩沢稔　浜崎邦子　浅野十糸子　渡辺信一　平野英俊　高橋和子　塩見昇　細野公男　浜田敏郎　石塚英二　今まど子　平田守衛　小川徹　岩淵泰郎(新)　高木進　中村泰正　室伏武　埜上衛　宮内美智子　清水正三　近川澄子(新)　荒岡興太郎(新)　小林宏　澤井清　森睦彦(新)　鈴木英二　田口瑛子　丸本郁子　小川鉚一　福島康子　友野玲子　前島重方

昭和59年度
亀田弘　中村泰正（千円）　宮内美智子（千円）　田口瑛子

編　集　後　記

会報第17号をおとどけ致します。本号は5月の部会総会及び9月初旬に開かれた研究集会の記録を中心にいたしました。

黒沢氏のペーパーは，この研究集会のためにわざわざご御執筆下さいましたので，参加されなかった方がたの為にも全文掲載してほしいとのお声があり，そのように致しました。

本号からベテラン北島武彦氏にかわって，私が担当することになりました。編集・割付け等始めての事なのでマゴマゴし乍らまとめました。御不満も多いと思いますが，早く慣れる様努力いたしますのでお許し下さいませ。

（今まど子）

会　員　消　息ー続き

森川彰氏梅花女子大学へ

本年4月より梅花女子大学に司書課程が開設され，関西大学図書館の森川彰氏が専任教授として就任された。

有倉久雄氏常磐学園短期大学へ

木寺清一氏の引退に伴い，後任に有倉久雄氏が専任講師として就任された。

転　居

浜田敏郎氏

新住所：〒

Ｔｅｌ：